

九点

④ 小春日や真綿のやうな子をあやし

荒木ツル子

先日、小春日和につられ、久しぶりに伊勢山皇大神宮に行ってみました。急な階段に息を弾ませての参拜でした。折しも社には、お宮参りをする姿がありました。それぞれに真綿の様な赤ちやんで、思わず「おめでとう！」と、声をかけて居りました。気分の良い一日に感謝でした。

② 太刀魚の一直線の黙ならぶ

柏尾のり子

九州の魚屋では、魚は一匹のまま台の上に並んでいて、それを捌いてもらうことが多いのです。ピカピカの太刀魚が何本も並んでいるところは見事で、その様子を俳句にしました。

八点

① いつまでの单身赴任鯨の潮

増田 守

埠頭等で沙魚釣りに興じている人たちの境涯はいろいろであろう。鯨日和を楽しんでいるかのような人たちの中には、のんびりとした支社勤務を切り上げて、本社勤務への早期復帰を目指している人もいよう。

六点

② つきあいの長き医者や柚子黄なり

岩野ヤエ子

もう四十年以上も、同じ歯医者さんにお世話になっています。その歯医者さんも年をとられ、私も年を取り、どちらが先にダウンするかと、訪れる度に思います。歯が悪くなくても、年に、一度、チェックしていただくため訪れます。柚子が色づくころになると、「今年も、そろそろ行かなければ」と思うのです。

花数を日記の隅へ白木樅

藤本 友子

大きく育つのが嫌で、鉢植えにしている白木樅。それでも、けなげにポツポツ花を咲かせてくれます。一日花で寂し気な花ですが、毎朝、花数を数える習慣となり、日記に記入していました。

五点

養虫の糸へ路地裏明け渡す

恩田 才美

生け垣や板塀越しの枝、そして生活の匂いのする路地裏という場がどこにでもあつた時代。誰かが迎えに来る暮れ方まで子供達の遊ぶ声の絶えない所であつた。養虫の頭が光って見えたのは、夕日を見ていたからなのか、揺れている糸は子供達と一緒に遊んでいるつもりだったのか。

自分にとって苦いことも遠慮会釈なく言ってくれる人が逝ってしまった。口癖は、「裸の王様になるなかれ」である。最後の手紙になってしまった。

① 舞う落葉赤い前だれ六地藏

稲葉 幸

道路沿いに並んでいるお地藏様に新しい前だれを一枚づつ掛けている年輩の女性に会いました。縫い上げて、掛けに来るのが楽しみなのだそうです。

① 秋日傘たたみぬかづく墓前かな

辻 幸子

両親のお墓に行くには電車で三時間程かかります。ふだんはなかなか行くことが出来ないので、毎年、春と秋のお彼岸には必ず行くようにしています。今年の秋のお彼岸は暑くて日差しが強く日傘を手放すことができないような日和でした。墓前で線香をあげる時だけ日傘をたたみました。その時のことを詠んだ句です。

穏やかな母の寝息や虫時雨

藤本 友子

あわただしい介護の毎日、あつという間に一日が過ぎ去ります。そんな中、母が穏やかな寝息を立てている時だけが、私の時間です。ほっとして虫時雨を聞きつつも、これからの不安も感じている状況を句にしました。

乳呑み児の笑ひかけくる敬老日

佐渡谷秀一

電車へ乗ると少子化の話は嘘のように、若い母親に伴われた乳呑み児が多い。寝ている児、泣いている児、大人しくしている児、手足を奔放に動かしている児（少女のような母親は慣れていて逆らわずいなしている）など。中には、他人の私に向い、にっこりしてくれる児がいる。勿論、眼鏡の白髪老人を敬つてのことではないが、明るく、積極的な大人に育つて欲しいと思ったりする。

人よりも人らしく在り案山子かな

柏尾のり子

長崎県の焼物の町、波佐見町に行った時の句です。波佐見町の鬼木棚田は、日本棚田百選に選ばれていて、ちようど案山子祭りが行われていました。人と見まがうような案山子が沢山あって楽しく見て回りました。一方で、余りに巨大化している二十一世紀の大会と、地方の小さな町の営みが、同じ時空内に存在しているアンバランスを、考えさせられました。